

ほくと化け姉さん

しかた しん・作/石倉欣二・え



創作子どもの本 9

ぼく
と
化け姉さん

しかたしん

金の星社

ぼくと化け姉さん

創作子どもの本 9

1975年 5月／発行◎

著者／しかた しん

発行者／斎藤佐次郎

発行所／株式会社金の星社

〒111 東京都台東区小島 1丁目 4-3
電話／東京03-861-1506(代表)
振替／東京0-64678

印刷／共同印刷株式会社

製本／東京美術紙工

乱丁落丁本はおとりかえ致しますので、お求めの書店または本社へお申し出願います。

913 しかた しん

ぼくと化け姉さん

金の星社 1975

182 P 22cm (創作子どもの本 9)

基本カード記載例

8393--041091--1406



はじめに／しかたしん

元気のよい　ありんこ松。

ちよっぴり気のよい　おれくん。

ふたりの子どもが、

ぼくの机のまわりや、

原稿用紙の中で、

とびはねておりました。

いまや　本になり、

みなさんの　おてもとにあるというわけです。

ふたりが　みなさんと　ともに、

元気よく　人生という　一つの山を、

のりこえることが　できるよう

作者の**ほくも**、

手をふらずには　いられません。

もくじ

ぼくはおれだ 6

パパの穴ぐら^{あな} 19

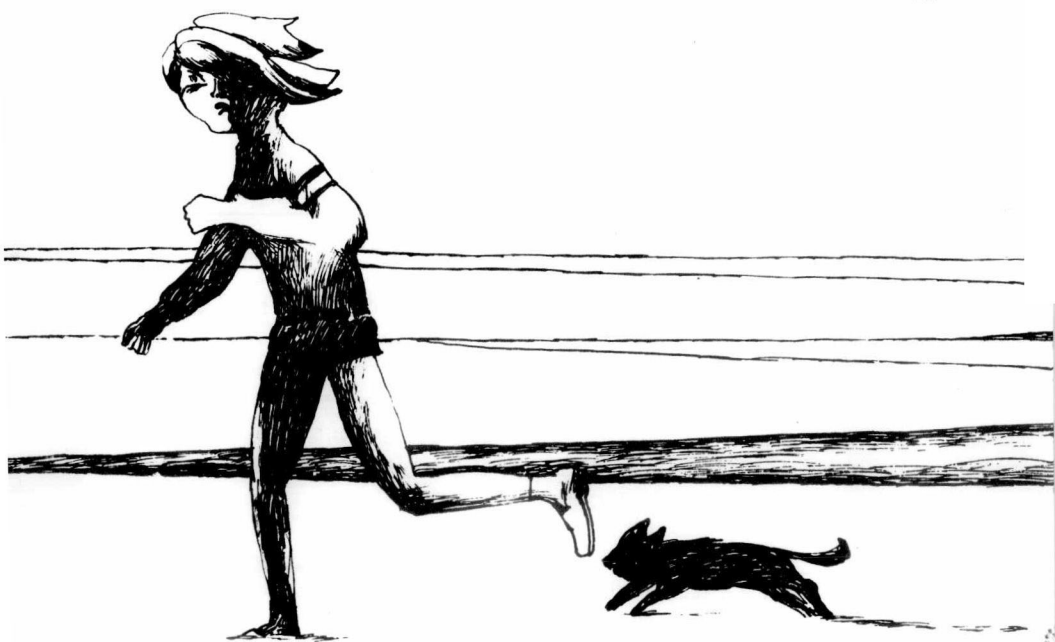
お化けやしきの化け姉さん^{ねえ} 36

ママとのやくそく 87

パパはアフリカ……………98

行くぞ！ 化け姉さん……………138

あとがき……………182



しかた しん

1928年、朝鮮京城府に生まれる。朝鮮京城大学予科を卒業し愛知大学を出る。中部日本放送に勤務かたわら演劇運動や児童創作活動をする。現在は退社し創作にうちこむ。

おもな作品に『むくげとモーゼル』『むくげと 9600』『笑えよ！ヒラメくん』などがある。

現住所一名古屋市千種区徳川山町3-4-8

石倉欣二 (いしくら きんじ)

1937年、香川県に生まれる。東京芸術大学工芸科を卒業し、デザイナーとして出発する。1970年頃から児童図書の装幀・挿絵を手がける。

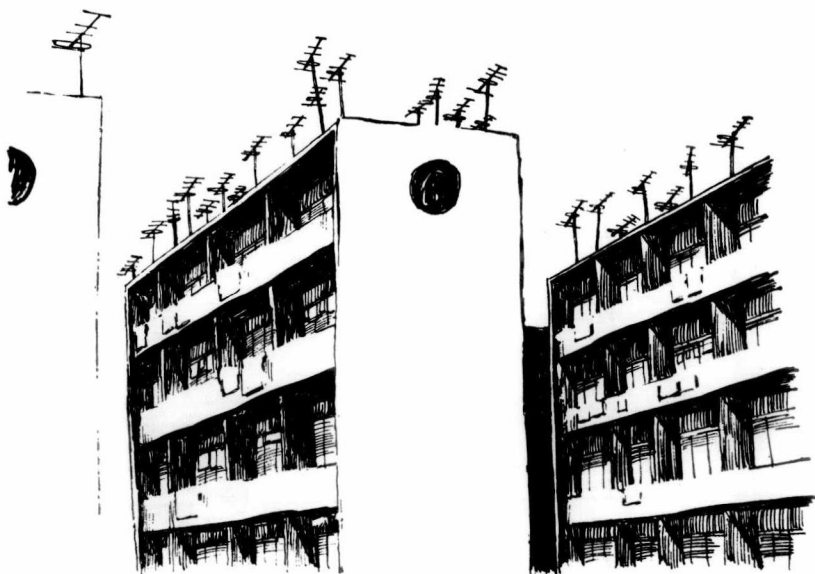
おもな作品に『ふしぎなものの話』『タケシとのねずみ小学校』などがある。

アトリエー東京都品川区北品川3-6-46
ハイツ北品川801

創作 子どもの本 9

ぼくと^は化け^{ねえ}姉さん

しかた しん



ぼくはおれだ

《ぼく》というのは、おれのことだ。

けれど、ママは、おれなんていつてはいけないという。だから、ママの前では、おれはぼくに化^ばける。

ぼくと仲^{なか}のいい、かどのうどん屋^やの《ありんこ松^{まつ}》は、うちでも学校でもおれだ。

ありんこ松といっても、ありの子どもではない。

ちゃんとした人間^{にんげん}の、子どもさまだ。



ただ、ありのように、色がまっ黒で、いつも、ありのように、うんどう場じやうや、学校のなかをはしりまわっているの、ありんこ松という、あだ名がついた。

太田おおた松助まつすけという、いかめしい名前があるが、だれも、太田くんとか、松助くんなんてよばない。女の子まで、ありんこ松ちゃんと言っている。

ありんこ松は、またの名を、ペロリの松ちゃんという。

やつは、なんでもかでも、ペロリペロリと食たべてしまう。給食きゆうしょくでみんなのいやがるゼリーまで、ペロリと食たべて、へいきなものだ。

「おいしいのかい？」ときくと、

「おいしくもないけど、まずくもない。」という。

そして、「おれ、しょうらい、すごい名めいコックになるんだ。その

ためには、なんでも食べなきゃ。」と、いつている。

そのありんこ松は、ママの前でも《おれ》だ。

松ちゃんのママは、それであたりまえのような顔かおをしている。だから、ぼくがママに、

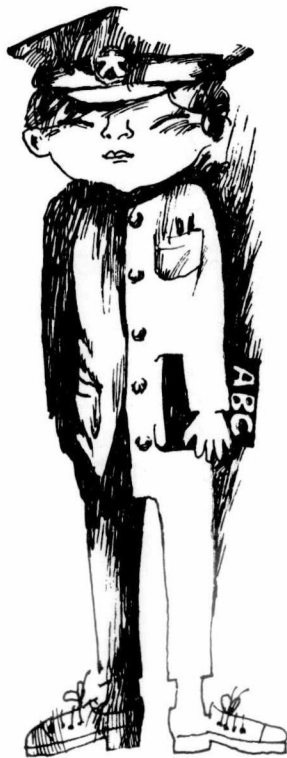
「松ちゃん、うちで、おれっていつてるよ。」

というと、ママはこわい顔をして、

「松ちゃんと、ぼくはちがいます。ぼくは、高等こうとう学校から大学に行つて、パパより、もっとえらい人になるんですよ。ママといつか、そうおやくそくしたでしょう。そういう子どもは、おれなんて、いわないことになってるんです。」

と、おこられてしまった。

パパよりえらい人になるやくそくを、いつしたのか、ぼくはよく



おぼえていないけど、ママの頭あたまの中では、そういうことになっていくらしい。

ママは自分じぶんできめると、パパもぼくも、みんなさんせいした、ときめてしまいうくせがある。

ママは、くすりがだいすきだ。

ぼくの一日は、朝、くすりをのむことからはじまる。

ママにいわせると、病氣をしてからくすりをのんだっておそいので、病氣をしないためにのむ、ということなのだ。

これを、パパにいわせると、ママの氣やすめに、おつき合いのためのも、ということになる。もちろん、こないいかたは、ママにはないしょだ。ぼくとパパのあいだだけの《男と男のひみつ》だ。

はじめは、黄色い丸いたまで、ちょっとくさいにおいがしたのを、ふたつぶずつ、のまされていた。そのくすりが、あまりのみすぎると、からだに悪いということが、なにかに書いてあったとかいうことで、ママはあわてて、べつのくすりをみつけてきた。

こんどは、いくらの中でも、からだに悪いことはない《かんぼうやく》とかいうのだそうだ。とても苦くて、のみにくい。のんだふりをして、半分はすててしまうことにしている。

パパもぼくといっしょに、その苦いくすりをのまされている。パパはからだが大きいので、ぼくの二倍はのまなきゃいけない。ぼくが、

「せんめんじよで、のむふりをして、すててしまうといいよ。」
と、教えてやると、

「ばかいい。こんなたかいくすりを、すててしまうなんて、もったいない。」

といって、目をつぶって、まゆをぎゅっとしかめながらのんでいく。パパは、この名古屋でも、ゆうめいな電気せいひんの会社にとめている技師だ。

ママにいわせると、

「とつても頭のいいエンジニア（きかい技師）ということで、けっこうしただけど、考えないでもいいところで、へんに考えこむ悪いくせがあるって、いつもドジってばかりいる。」

と、いうことだ。

ドジリ屋かどうかは知らないが、とつぜん考えこむくせがあるのは、ほんとうだ。

このあいだも、近くのお宮^{みや}に、いっしょにさんぽに行ったとき、かいだんのとちゅうで、きゅうに立ちどまって、なにか考えこみはじめた。

「どうしたの？　パパ。」

と、きくと、

「この石だん、どうもへんだ。」

といって、考えている。

「なにがへんなの？」

というと、

「むかしの人は、きものをきていたし、足も今より短^{みじか}かったはずだ。それなのに、この石だんのはばは、大きすぎる。むかしの人たちは、こんなにはばのひろい石だんを上りおりしていて、こまらなかつた

